

コロナ禍での日本の劇場・オペラ団体 ～藤原歌劇団に聞く～

折江 忠道 (藤原歌劇団総監督)

小澤 慎吾 ((公財)日本オペラ振興会事務局長)

石田 麻子 (聞き手／『日本のオペラ年鑑』編集委員長)

2021年9月16日実施

公演の実施状況

石田：去年の2月ぐらいから、新型コロナウイルスが日本にも直接影響を与えるようになって、藤原歌劇団の公演では中止になったものはありますか。

折江：委託公演で中止になったものはあるのですが、主催公演では全てが延期の末、公演を行っています。もともと2020年の4月に、「しんゆり芸術祭 アルテリッカしんゆり」の《カルメン》が川崎のテアトロ・ジーリオ・ショウワで行われるはずだったんですが、これが真っ先に、コロナとぶつかってしまって。

石田：その《カルメン》が8月に延期になって実施されましたが、実施するという判断はどのようなものだったのでしょうか。

折江：きっかけは、緊急事態宣言が夏ごろにかけて少し緩んだことでした。1回目の緊急事態宣言が5月25日に解除されて、イベント開催制限も6月にかけて緩和されていったことで、とにかくお客様を入れて、入場者数の制限をしっかりと守り、感染対策をした上で公演ができるということになったものですから、何かいい方法はないかとさんざん考えました。けっきょく本番はフェイスシールドを全員装着し、直接対面で歌うことがないように舞台の上についたてを立てて、さらにオーケストラも密集を避けて、舞台上に乗せました。だから、スペース的には演奏会形式のように作り、一番前のエリアを歌手のた

めに空けて、そこで演技をして、全くオペラのように公演するということを考えついたんです。

今ではフェイスシールドは感染防止には大して役に立たないという科学的見解が出ていますが、当時はどうしたら予防ができるのかというのは、全く暗中模索の状態だったんです。マスクを着けて歌うのは歌手にとってはおもう大変で、拷問みたいなものですから、それは出来ない。フェイスシールドを私自身がたまたま着けて歌ってみたところ、「これは出来る」と思ったのが、まず大きなきっかけでした。

稽古は嚴重に、フェイスシールドだけでなくマスクも着けた状態で行いました。本番だけはフェイスシールドのみを着け、それからついたてを立ててと、いろんなことを考えながら、なんとか公演にこぎ着けたという状態です。

石田：そうしますと、そもそも4月に予定されていた公演の演出内容とはずいぶん変わったということですね。

折江：そうです。全く変わりました。それを快く承諾してくれたのが演出の岩田達宗さんでした。お互いの距離感だったり、直接触れないための演技変更や、どうしても触れる場合は手袋越しにとか、神経質過ぎるほど気を使って、率先していろんなことを考えてくれたのです。だから、あれは画期的な公演だっ

たと思います。それでもって、感染者が1人も出なかったというので、すごく効果てきめんな公演だったと思います。

石田：子どもたちは出演しなかったんですか。

折江：出しませんでした。《カルメン》の児童合唱はカットしています。

石田：カットしたところは他にありますか。

折江：兵隊の交代のところの、最初の児童合唱の曲だけです。

石田：では、全体はほとんどカットなしで上演されたということですね。その《カルメン》の後ですが、2020年内に本公演はおこなわれましたか。

折江：日生劇場での《フィガロの結婚》がありました。2020年の6月に予定していたのですが、2021年1月に延期になりました。

石田：21年の延期公演では演出はやはり変わったのでしょうか。

折江：ずいぶんと変わりました。ただ、これは演出が変わったというより、6月の稽古自体をまだ始めていなかったんです。それが延期になって21年1月となったものですから、公演に向けては最初からコロナを前提に入れて稽古をして、変更というのはなかったです。

石田：分かりました。演出のマルコ・ガンディーニさんは、この時いらしていたんですよね。

折江：ええ、いらっしゃいました。

石田：その他に2020年では学校巡回公演で、メノッティ《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》をされているようですが。

折江：しました。文化庁の巡回公演が、20年10～12月に予定されていて、学校によっては、地方の学校だと「来ていただいて構わない」というところがありまして。予定されていた7校のうち、中止になったのが3校、公演を行ったのが4校という状態でした。

石田：この時の小学校での公演の際の状況は

いかがでしたか。折江さんも出演はされたんでしょうか。

折江：はい、校長先生の役で出演しています。普段この公演に関しては、生徒さんや児童さんが一緒に舞台上で立って、一緒に歌い一緒に踊ってというのとセットにしているんですが、さすがにこの時は児童と一緒に交わって合唱を歌ったりということはなかったです。児童・生徒さんは完全に観客としてそのオペラを観るというのが基本でした。

また、各学校に伺った時に、その学校の校歌を歌うというのがあるんですが、その校歌は、客席でみなさんマスクをして歌っていました。あと僕の記憶では、1ヶ所かな、踊りだけ参加するという学校があったのですが、その踊りも、小学生だけが舞台の前面に出て、ただ舞台上で鳴る音楽に合わせて舞台の下で踊っていたという状態で、オペラの中の進行として一緒に何かをつくるということは、残念ながらできなかったように思います。

石田：そういう変更はあったけれども、4つの学校で実施できたということですね。子どもさんたちは、反応はどうでしたか。

折江：いやあ、良かったですね。そもそも巡回公演というのは、子どもたちの素直な反応が、まさしくダイレクトに伝わるんです。筋立てとして、舞台上で校長先生が宇宙人に襲われるわけですよ。校長先生の後ろに宇宙人が近寄ってくると、小学生たちが「わー、逃げろ、逃げろ！」と声をかけてくれる。だから、それほどに児童たちは夢中になってくれた、そういう意味での参加というのはあります。あれほど素直に、舞台に向かっていろんな声をかけてくれるというのは、なかなか普段ではないですね。そういう意味では、一緒に参加しているという感じです。

石田：20年の公演ではもう一つ、「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」でのヴァッカーイの《ジュリエッタとロメオ》

が中止になってしまったんですね。これも残念でした。

折江：その代わりにロッシーニの「小ミサ・ソレムニス」を急ぎょ演奏しました。これも苦肉の策です。でも、ロッシーニのあの名曲を全曲演奏する、良い機会になったかなと思います。

石田：ちょっと年は越えてしまいましたが、2021年1月の《ラ・ボエーム》も演出が変わっていましたね。群衆のシーンとか、全然違っていました。子どものシーンは録音でやられたということですね。

折江：はい、児童合唱はスタジオで録音して、それと生の演奏とが全くずれないようにしました。実際に子どもがいるんだと思ったお客様が数多くいらっちゃって、その辺の技術の絶妙さが、舞台でも発揮されたと思います。あれも演出が岩田さんでした。《ラ・ボエーム》もディスタンスを確保できるソロの歌唱以外はフェイスシールド着用で本番を行っています。ついたてはなかったですが、この時は直接手と手を触れる、あるいはラブシーンがあったものですから、お客様には分からないように素肌に見える手袋を着用して本番をしました。

所属アーティストの状況

石田：コロナ禍での藤原歌劇団として、折江さんとしてのお気持ちは、歌手、合唱団の方たちに歌う機会を確保しようということだったのでしょいか。

折江：そのとおりです。8月に《カルメン》を公演するまで、とにかく業界が全部ストップしていた状態なんです。それで《カルメン》を公演しようと決断したのは、まさしく歌手、そしてオーケストラ、それからスタッフ関係、いわゆる舞台関係者の仕事をなんとか開始できないものかということが、まず頭にありまして。ですから、可能性をとことん求

めて、それで信じられる方向に公演を持ち込んだといういきさつがあります。

石田：《カルメン》の時は、コロナ禍で公演が全てストップしてしまって、歌手の方々にとっては、本当に久しぶりに声を大きな会場で出して公演に臨むという状況だったと思うんですが、歌手たちもちょっと緊張感や戸惑いもあったりしながら公演に臨んだのではないかと思います。折江さんの感触はどうでしたか。

折江：私の感触としては、ようやく人前で歌えるようになったという、喜びの方が多かったような気がします。確かにコロナというものに対しての警戒感是非常に強かったんですが、むしろマスクをしてでも、フェイスシールドをしてでも、とにかく人前で歌えるということが歌手の喜びであるということ、みなさん実感していたように思います。その点で、私どもの歌手さんは、いつもつくづく思うんですが、歌うことが好きで、大げさかもしれませんが「歌に命を懸けている」というような人が多いような気がします。そして素直で、ある意味では貪欲で、自分に対して厳しい人が多いです。

石田：その出演者の方々も、本当につらい時期がずっとあった中での公演だったのでしょいか。その他に藤原歌劇団の所属の歌手の方々の活動状況、つまり他の合唱団に行って指導するとか、合唱が出る公演に出演するとか、そういったことも、全て止まってしまった状況だったんでしょいか。

折江：委託公演、合唱関係の指導や個人指導、カルチャースクールで教えていらっしゃるとか、藤原歌劇団の仕事以外の仕事をなさっている方が、結構いらっしゃいます。それが全部中止になってしまった。みなさん本当に何もすることがなくて、大変な思いをして、悶々と暮らしていらしたと思います。本当にそういう苦しみに耐えて、耐えて、《カルメ

ン》の稽古までの半年間ぐらいというのは、仕事は全く何もできなかった状態だったようです。

そして、この間に彼らは何をしていたかという、ちょうどいい機会なので、歌、自分の声に関して、一生懸命に精査していました。もう一度自分の声というものをよくよく考えて、まずいところは直して、ちゃんとしたものにしようと、一生懸命声を出していらっしゃる方が多かったようです。

ただし、アパートなどに住んでいらして、声が出せない人が結構いらしたのです。そういう方々は、公園に行って声を出したとか、多摩川の川べりに行って声を出したとか、いろんな話を聞きます。上手くいって「わあ、すごいですね」と言われる時もあるし、「このコロナの最中、いくら公園とはいえ大声で歌ってけしからん!」とお叱りを受けた方もいらっしゃるようです。みなさんそれぞれの苦労があったようですが、こういう時だからこそ自分の歌と向き合おうという人たちがほとんどだったように思います。

そして、ここが大事なところなのですが、そういう6カ月にわたる沈黙の時期があって、稽古で久しぶりにみんなと会ってみたら、みなさんの歌に何かしらの変化があった。これまでの期間が全く無駄ではなかったなということに、私は正直ホっとしたと同時に「みなさん偉いな」と思った瞬間でもありました。

石田：何が変わりましたか。

折江：やっぱり技術と、あと自分の気持ちの確認じゃないでしょうか。歌に対する、「歌がこんなに大事なんだ」ということを、みなさんそれぞれ確認したのだと思います。それで歌に対する態度が変わった。それから技術的に声の点でも、進歩がかなり見られたと思います。

石田：自分と向き合うことによって、技術的

にも精神的にも高まったという。

折江：そう思います。それが舞台上に現れます。ですから《カルメン》以降みなさんの歌、歌手それぞれの方の出来栄って、変な言い方なんですけど、みなさんすごく真に迫った表現ができてるように思います。実生活と、あるいは生きていく上での決心とか、そういったものというのは、舞台に絶対に出ます。ごまかしが利かないというか。逆にそういうものを持っていない人が舞台で歌うと、それがすぐにばれてしまう。本当に舞台って、僕は恐ろしいと思います。

石田：本当ですね。

折江：丸裸で舞台上で立っているのと同じことになりますよね。藤原歌劇団の歌手さんというのは、みなさんそういう意味では、嘘をついていない。真正直に、舞台の上であからさまに自分というものを裸でちゃんと表現します。そこが魅力だし、藤原歌劇団のいいところじゃないかなと思います。

観客について

石田：そういった藤原歌劇団の活動再開を迎えるお客さん側に関してですが、《カルメン》の時は私もお客さんの1人として伺って、何だかみなソワソワして、いそいそと会場に駆け付けていたような気がしましたが、いかがお感じになりましたか。

折江：「よくやってくれました」「待ってました」という方が本当に多かったです。「やはり生の演奏が最高ですね」「生の舞台が最高ですね」というふうに言葉をかけて、帰路に着く方が多かったです。人によっては涙を浮かべていた人もいました。ありがたいことです。

石田：学校公演では東北をかなり回られたと思いますが、首都圏とその他の地域で感じられた違いとか、お客様だったり、受け入れる学校側とかの反応の違いで、何かお感じになられたことがあれば、ぜひ教えてください。

折江：学校公演の場合は、東京から遠ざかれば遠ざかるほど、やはり大らかな気がします。行く前にはちゃんとPCR検査をして、陰性であることが確実に分かって、そして先ほど申し上げたように児童が直接参加するワークショップがない状態、児童が観客として存在するだけという状態になると、やはり舞台と客席との距離感が自然な形で再現でき、そういう点で、わりと大らかに受け入れてくれたような気がします。それが都心になると、規制・制約などなかなか難しかったように感じます。オペラの本番による地域性というのは、コロナがどうこうというよりも、むしろ劇場の立地条件、例えば都心でやるのか、テアトロ・ジリオ・ショウワでやるのかといった、土地の利便性、距離と非常に大きな関係があるんじゃないかと思います。

石田：お客様では、高齢者が怖がって、なかなか来られない方がまだ多いという話も耳にしますが、その点はいかがでしょう。

折江：年齢の問題なんです、今回《清教徒》（2021年9月）でも、2日間続けて来られた高齢の女性の方がいらして、少しお話することができたんです。その方は高齢にもかかわらず、もともと喘息の気があって、ちょっと憚られるということで、ワクチンを打てていないのだそうです。「それなのに来ていただいたんですか？」と言ったら、「もうこの年になったら、とにかくいいものを観たいというか、感動したい。そっちのほう強い」というようなことをおっしゃって、「わあ、すごいな」と思いました。その方は2日とも来場されましたが、本当にお元気で。「くれぐれもお気を付けください」と2日目のお帰りの際に申し上げました。コロナだからなおさら、あるいはもうかなりの年齢だからなおさら、観ておきたいという方がいらしたことに、私は逆に頭の下がる思いでした。

配信について

石田：コロナ禍ではストーリーミングの活用、上演したものの配信というのは、藤原歌劇団もされていますよね。

折江：OPERA de STAY HOMEという企画で、自宅待機をしているみなさまへ向けて、過去に公演した藤原歌劇団のいくつかの作品を期間限定で無料配信しました。コロナ禍で上演したオペラとして丸々1本配信したのは《カルメン》だけで、ロッシーニの小ミサ曲の方はしていません。あとは日本オペラ協会と一緒にやった団会員コンサートの配信をしております。

石田：今まで、劇場で歌って観ていただく、ある程度お客様と距離感を持って鑑賞していただくというスタイルでしたよね。それが映像の配信になりますと、顔もアップ、口の形、表情まで、それから演技の些細なところまで映像に映ってしまう。それは歌手にとってはどうなのでしょう。

折江：映像配信は、個人のレベルでやっている方もいらっしゃる、見栄えとかいろいろ細かいことを考えたものもあって、それぞれのやり方があるかと思います。ただ、舞台上で歌うということに関して、私の考えを述べさせていただくと、いったん舞台の上に立ってしまったら、お客様がいようがいまいが、あるいは収録があるうがあるまいが、歌っている側の焦点というのは、一番遠くの客席の1人です。つまり、2,000人のホールであっても、2,000人に歌おうと思ってなくて、一点を見つめて歌っているはず。その一点というのは何かということお客様です。東京文化会館で最上階の一番奥の席となると、ほとんど見えていないんですが、そういうところに焦点を合わせて、声も演技も全てやっているはず。私も常々そうすべきだと思っています。その時に、この人が見ている、あの人が見ている、それからカメラがこ

ここにあるということは、全く意識していません。焦点は必ずどこかに、なるべく遠い場所に一点あります。劇場によっては照明室のガラス張りが見えるところがあって、人によってはそういうところという方もいるようですが、けっこう遠い場所にある一点を目指して、演技も歌も全て集約して歌うという観念的なものがあるんです。

石田：先ほど舞台上では、あらゆるものが見えてしまうとおっしゃっていましたが、それを見せる覚悟でやっているということでしょうか。

折江：そうですね。もっと言わせていただくと、私も今まで舞台上で歌って、それが収録されて、テレビ放映されたりしますよね。そうすると、「いやあ、こんな状態でやっているのか、なんて醜いだろう…」と思う反面、成功や失敗とかそういうことから離脱した、「真正直にやっているな。たとえそれが失敗だとしても、それが正直で真実なところなんだな」と、いつも納得するんです。あの瞬間というのは、一種独特の聖地というか清らかな一点というか世界だと思います。そういう状態になれるのが舞台だと思います。

資金面について

石田：話は変わりますが、経営方面では、例えばファンドレイジングや、コロナ対応の補助金などの獲得状況はいかがですか。小澤さんから教えていただけますか。

小澤：ファンドレイジングは、今後やっていく計画を持っております。補助金については、日本芸術文化振興会から助成金の他に、感染症対策に関する補助金も頂いています。そのおかげでPCR検査も、以前よりは数多くできるようになっています。また、折江総監督、日本オペラ協会の郡愛子総監督にもお願いして、オペラ公演の後に会場で募金活動も行っています。

その他、補助金には文化庁のものも当然ありますが、民間には、オペラに対してだけではない様々な形態の補助金があり、それらへの申請が昨年度からかなりの数に上っております。例えば、凸版印刷による助成金事業の一環で「藤原歌劇団公式AR BOOK」というものを作成しました。この本から、スマホで画像を読み込むと、動画を視聴できるというものです。内容としては、藤原歌劇団の歌手の宣伝のための紹介動画と、さらに藤原歌劇団公演の《蝶々夫人》、ロッシーニの《ラ・チェネレントラ》の公演の一部も動画で視聴できる、AR技術を使ったものを、助成金を頂いて作った次第です。ただ、これは視聴期限があって、ずっと売り続けることができないのです。基本的には1年という期限内で、いつでも見られるというものです。公演の会場でも販売して、最初の頃は販売数がかなり伸びました。

そういった助成金を4つ5つと使って、いろいろやっておりまして、仕事自体は増えてはいます。ただ、本公演に対する補助金というのは特に増えたわけではございません。

石田：いろいろご苦労なさっているわけですね。今年度は、公演が続けられて、コロナ対応の補助金も獲得されていらっしゃるようですが、さらにその後となるとどうなっていくのでしょうか。

小澤：チケット収入がかなり厳しい状況です。先日行った《清教徒》もそうでしたが、緊急事態宣言ということもあって、収容率を50%以下に抑えなくてはなりません。さらに藤原歌劇団の場合、お年を召したお客様が非常に多いものですから、コロナ禍で「今、出歩くのはちょっと怖い」という方もいらっしゃる、なかなかチケット販売数に結びつかなくて、経営としてはかなり厳しいです。

石田：学校公演が中止になった場合は、キャンセル料というのは出ないのでしょうか。

小澤：そうです。基本的には実施したものに
関して出るものです。結果的には2020
年は通常の半分ぐらいはキャンセルになっ
ております。2021年の場合は、「事前のワー
クショップは、ご遠慮いただきたいですが、
本番だけお願いします」というところが多い
です。

若い歌手たちへ

石田：折江さんは教育者であると同時に、歌
手の立場でもいらっしゃるということもあ
って伺いするんですが、若い歌手たち、大学
を卒業したばかり、あるいは大学院生ぐら
いの、これからいよいよ歌手としてやってい
こうという方々にとって、このコロナ禍とい
うのは非常に大きな試練だと思います。こ
ういった時に彼らは何を思っ、何を目指して
日々鍛錬していけばいいのかというお話を聞
かせていただけませんか。

折江：これは個人差がすごくあるのではない
でしょうか。新型コロナウイルスという大き
な、大きな障害があって、その障害と難関に
ぶつかった時に、初めて本人の奥に潜む本性
というか、本質みたいなものが表に出てくる
のだと思います。そして、「コロナだからこ
う歌えません」とか、「コロナがこうだから
駄目なんです」と、コロナのせいにして、何
か歌に悪い変化が起こってくるというのは、
私は個人の問題だと思うんです。ですから、
コロナ禍では「どうしたらいいんだ…でも歌
うしかない」という結論に、多くのみなさん
が至ったみたいです。今まで、ただ声を出し
て、ただ歌っていたような人が、やはり今こ
の時期に、歌手という存在そのものに、言葉
の力というものに気付かされ、勉強をし始め
たりしています。それから、今の特に若い
かたは、CDや音源の入手が容易になって、簡
単に演奏を聴くことができる状態ですから、
普段はそういう状態でレッスンに曲を持って

きている生徒がほとんどなのですが、コロナ
禍では、時間に余裕があるせいか自分の歌う
音符をちゃんと見て、自分の歌うところの音
をちゃんとピアノなどで弾いて歌ってくる、
という気配が見えます。だから、耳勉強じゃ
なくて、実際自分の行動で一音一音確かめ
る。言葉をちゃんとしゃべってみるとか。そ
ういう勉強ができてきているような気がしま
す。私たちが学生の頃—もう今から50年以
上前の話ですが—、レコードなんてなかなか
買えなかったし、簡単に聴けなかったです。
聴くためには、東京文化会館の音楽資料室に
行って、わざわざそこで聴くしか方法はな
かった。だから、自分で楽譜から音を取って、
楽譜で伴奏をちゃんと弾いて、そして自分の
歌う曲を勉強したのですが、今の若いかたは
そうではなく、簡単に耳で聴いて勉強してき
ます。でも、それがちょっと直されつつある
のではないのでしょうか。

石田：そういう機器やインフラの発達で、学
習の方法や態度にも変化を与えてきていたの
が、このコロナ禍で、自分と向き合うための
ツールとして使えるんだ、ということに気付
いた。それに気が付けた人は、良くなってい
るということですかね。

折江：そういうことです。でも幸いなことに、
気が付きだしている人が多いような気がして
います。やはり自分と向き合うことが、すご
く大事なのだと思います。少なくともコロナ
というのは、各自それぞれ自分の本当の姿と
向き合う機会を与えてくれたんじゃないで
しょうか。

石田：深いですね。最後におっしゃりたいこ
とはありますか。

折江：コロナ禍を通じて、一番大変な思いを
なさっているのは、事務局の方だと思います。
事務関係の書類を書いたり、具体的な手
はずを整える、その事務方がどんなに苦労し
ているか。補助金や助成金をいろんなところ

から出して頂けるのはありがたいのですが、それには手続きが必要だし、利用するには細かい規程がいろいろあって、そういうものを全部対処しているのが事務方のみなさんなので、その仕事量はどんどん増えているんです。われわれ歌い手は、ただ稽古をして演奏すればいいだけなのですが、事務方は実際に健康問題にまで影響を及ぼす状態に陥りつつあって非常に心配です。そういった状況がこれ以上悪化しないように、ただただ祈るのみです。

それと、治療薬もできてコロナと共存する社会になり、コロナ以前の状態に徐々に戻っていき、席数制限が撤廃されて100%の集客になった時に初めて、オペラの今後の行く末

というものが決まる。だから、今は耐えているけれども、いざ開放された時に、オペラの真価が問われるのではないのでしょうか。その時まで、歌い手も事務方のみなさんを含めて、体力と気力と精神力を保持して、持ちこたえてほしいというのが切実なる願いです。

石田：分かりました。ありがとうございます。その「保持して」というのが、芸術への強い思いといったことになるんでしょうね。

折江：はい、そうですね。

石田：それを団としてどうやってつないでいくかという、本当に大変な時にいらっしゃると思います。その中でリーダーシップを執っていかなければいけないご苦勞が忍ばれます。本日はありがとうございました。